

また、状況を想像させながら登場人物をうつしだしていく手法はワイダの映像を想起させます。

このようなことからホラントをポーランド派の映画監督と考えますと、一つ興味深いことがいえます。それは、ポーランド人がドイツの芸術家ベートーヴェンをたたえた作品をつくったということです。一見なんでもないことのようにですが、ご承知のように第二次世界大戦はナチス・ドイツがポーランドに侵攻したときから始まったわけで、それ以前の歴史においてもポーランドはドイツから侵略を受けていましたので両国の関係は歴史的には良好ではありません。ベートーヴェンの「第九」にしても、ナチスが国威発揚の機会に好んで演奏した音楽でした。したがって、ベートーヴェンやドイツをたたえるのはポーランド人にとってタブーのような雰囲気があり、私の知る範囲でも、たとえばショパンがベートーヴェンやシューベルトから影響を受けていることを主張するのはタブーのような雰囲気が 20 世紀のショパン研究にはあります。それを考えますと、ベートーヴェンを描いたこの映画はポーランド派にとって画期的でもあります。

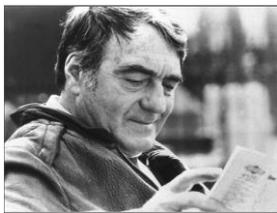
ちょうど今年ドイツでノーベル賞作家のギュンター・グラスがナチス親衛隊に属していたことを告白し(8月 12 日)、元ポーランド大統領のワレサ氏がグラスの「グダニスク名誉市民」称号剥奪に一時動

いて話題になりました。グラスの母親はポーランドの少数民族カシューブ人で、映画にもなった小説『ブリキの太鼓』の舞台は、「ダンツィヒ」と呼ばれていた頃のグダニスクです。グラスの例が示すように、隣の国でありながらも複雑な関係を持つポーランドとドイツを念頭におきますと、この『敬愛なるベートーヴェン』は、少し大げさですが、両国の今後の関係を予感させる作品なのかもしれません。

もう一度、話をワイダに戻しますと、ワイダとホラントの関係は、ちょうどベートーヴェンとアンナの関係に重なっても見えます。アンナが「私はベートーヴェンに仕えているのではなく、共同制作しているのです」と誇らしげに語るせりふは、ホラント自身のせりふとして受け止めるとき実感がこもっています。

何よりも、ホラントがワイダやポーランド派の流れをくむ監督であることを示す映像が冒頭にてできます。それは、「白い馬」です。ワイダのファンの方ならすぐに、あ、あの白い馬だ、と気づかれると思います。古くはワイダの名作『灰とダイヤモンド』にも、そして一番新しくは『パン・タデウシ物語』にも出てくる白い馬が『敬愛なるベートーヴェン』にも出てきます。この白い馬はポーランドの象徴で、ホラントは意識的に冒頭で白い馬を使い、ポーランド派として名乗りを上げているのにちがひありません。

クロード・ランズマン



『ショアー』のランズマンから見た

ワイダの『コルチャック先生』と

ホラントの『僕を愛したふたつの国』

小原 雅俊

かつて、ワルシャワ・ゲットーに閉じ込められた 200 人の孤児たちとともにトレブリンカの絶滅収容所で殺されていったヤヌシュ・コルチャックを描いたアンジェイ・ワイダの 1999 年カンヌ映画祭出品作品『コルチャック先生』に対して、翌年、フランスのユダヤ系知識人の間で、「記憶の帝国主義」「キリスト教による私物化」といった批判が投げかけられた。映画の幼い少年の頭上に現れるキリスト教の図像である光輪とキリストの贖罪と天国の比喩と解された映画の最後のシーン——トレブリンカに向かう輸送列車からコルチャックと子供たちを乗せた車両が離れ、スピードを落とし、草原で停まり、子供たちは、表に

ダビデの星が、裏に四つ葉のクローバーが描かれた旗を掲げて、まるでピクニックに来たのでもあるかのように嬉々として靄のかかった草原に駆け出すのである¹⁾。もちろん、字幕では彼らがどのようにして殺されていったかが伝えられる——が、ワイダがコルチャックを、ユダヤ人を救うキリスト教の聖者として描いたと非難される主たる根拠となったようである。

映画『ショアー』の監督クロード・ランズマンも *Sommaire* 誌の対談の中で²⁾、ワイダの『コルチャック先生』は「悪意ある反ユダヤ主義的な映画だ」と激しく非難した。ランズマンはここでも、ユダヤ人の絶滅には、最後のシーンで語られるような慰めはな

いこと、ユダヤ人全体の歴史を語るべきであって、ワイダのように個人的な物語を語り、それに普遍的価値を与えることはユダヤ人の歴史全体を歪めるものであるという主張を行っている。さらに、『コルチャック先生』のシナリオを担当したアグニェシュカ・ホラントについて、「嫌悪すべき映画『僕を愛したふたつの国(原題<ヨーロッパ、ヨーロッパ>)』を作った人間、と切り捨てて一方、ワイダはポーランド人のためのポーランド映画を作ったと言っているが、それならポーランドの中に留めておくべきで国の外に出す必要はないこと、コルチャックというポーランド化したユダヤ人はポーランド人にとってよいユダヤ人であるが、これからはワイダのおかげで、ユダヤ人にとってよいポーランド人になる、とも述べている。

ヤン・シチギェルのフランスでの『コルチャック先生』封切りの際の反応を紹介した記事によれば³⁾、この草原の寓意の中に「ワイダは焼却炉の存在を否定しているのだ」といった“歴史修正主義”の立場を見るような馬鹿げた解釈は一笑に付されたとし、観客の中に(哲学者、エッセイストの Alain Finkielkraut が言うように)「ユダヤ人は車で町の郊外にピクニックに出かけたのだと思って映画館を出た者はまさかおるまい」が、ワイダの結末のメタファーはやはり「キリスト教による私物化のための操作」のひとつと見なされたのであった。さらに、シチギェルは、子供の頭上に現れる光輪についてはコルチャック自身が『ゲッター日記』の中で触れていることであり、「コルチャックはやはり、ポーランドのユダヤ人だったのだ」との感慨を付け加えている。

ランズマンが、先の対談の中で激しい口調で、ポーランドには反ユダヤ主義はなかった、と語ったというワイダに、ユダヤ人を助けたポーランド人がいたことは確かだがそれはごくわずかでしかなかったポーランド人に、さらにはユダヤ人を救えたであろうに救わなかったポーランド人を意味するコルチャック、孤児院で子供たちにイディッシュ語を禁じ、ポーランド語しか話させなかったコルチャックのようなユダヤ人にも向けられている非難と、彼が自らの映画『ショアー』で作り出したユダヤ民族の絶滅を証言するための方法、「表象不可能なホロコーストの表象」の問題が深く関わっていることは疑いない。

にもかかわらず、ここで取り上げられた多くのことからは、今ようやく、ホロコーストの残虐の歴史と分かちがたく結びついた問題として認識されるようになり、一方でそれに対する激しい反発、拒絶反応をも再生産しながら、研究が開始されたばかりであることも確かである。この対談で、ランズマンは、ワイダはコルチャックという英雄的なユダヤ人を描く

一方で、ユダヤ人の恐怖は放り出している、それがポーランド人の真実とユダヤ人の真実の完全なずれなのだと語っているが、アウシュヴィッツ=ビルケナウがユダヤ人にとっては絶滅収容所であったのに対して、ポーランド人にとっては強制収容所であった事実が、自明の事柄として語り出せたのもつい最近のことではないのも現実である。

ひとりの「コルチャック」が生まれてくるまでには、ポーランド人とそのポーランドで何世紀にもわたってポーランド人とともに暮らしてきたポーランド・ユダヤ人の長い歴史がある。「西のユダヤ人が自分たちが暮らしていた国々の国民と融合することを願ったとすれば、東のユダヤ人は自らを別個の運命と別個の特質を持った別個の民族と感じていた」し、まわりのポーランド人からもそのように受け取られていた、とポーランドへの同化ユダヤ人である免疫学の権威であったルドヴィク・ヒルシュフェルトは自伝『ひとつの生の物語』の中で書いている⁴⁾。

「私はひとつ屋根の下で、二つの極端な社会構造が仲睦まじく、幸せに暮らすのを見てきた」、「祈りともに目覚め、祈りとともに眠りにつく」日々を送っていた敬虔なユダヤ人たち、と 1986 年に出たエッセイ集『デザート溢れるクラコフスキェ・プシエドミエシチュ』の中に書いたのは、アウシュヴィッツ後のポーランド文学の担い手のひとり、同化ユダヤ人作家のアドルフ・ルドニツキであった⁵⁾。ルドニツキが語っているのは、「絶滅」によってポーランドの土地から、ポーランドの風景から完全に消え去り、今や記憶からも失われようとしている、主としてポーランドで、部分的には「絶滅」まで生きていた東方ユダヤ人の宗教共同体の人々のことである。

言い換えれば、ポーランドの閉ざされたゲッターを生きたユダヤ人とは主としてこの敬虔なユダヤ人たちとポーランド社会の中に同化したユダヤ系ポーランド人、あるいは宗教共同体に根を持ちながらポーランド文化の担い手になろうとしていた、いわば同化へと向かっていたユダヤ人であったことも忘れてはなるまい。長い間、三国の分割占領下にあったポーランドでは西欧とは異なり、ユダヤ人解放が法制的に実現するのはようやく第一次世界大戦後の独立に伴ってのことである。ルドニツキが語るユダヤ人とは、すでに崩壊を遂げつつあったとはいえ、地方のユダヤ人集住地シュテットルで西欧のユダヤ人とは異なる独特の暮らしを営んでいたポーランド・ユダヤ人のことである。

確かに、ワイダの映画からは、こうしたワルシャワ・ゲッターに閉じ込められたユダヤ人がどのようなユダヤ人から成っていたかの説明は得られないだ

けに、“ユダヤ人一般”以外そこに見ることが出来ないかもしれない。しかし、ワルシャワ・ゲットーに強制移住させられ、閉じ込められた人々ひとりひとりに、それまでの生活があり、人間関係があり、歴史があり、閉じ込められた後もなお暫くは、それまでの習慣や価値観を携えて暮らすことになったのであった。閉ざされた過密な空間の中で、極度の飢えと病気に苦しみ、一切の希望を閉ざされ、ナチス・ドイツのテロに対する激しい恐怖におののきながら、トレ布林カへ移送されるまで、そしてその後も、驚くほどの抵抗の末に鎮圧されたワルシャワ・ゲットー蜂起のときまで、なおも生きたことも記憶に留められなければならない。そして、ポーランド人の無関心あるいは「悪意」によって生き残ることが出来なかった人々の生も、たとえ僅かであれ、ポーランド人の手助けで生き残ったゲットーのユダヤ人のその後の生もまた、ホロコーストの記憶の一部に留められなければならない。

ポーランドの現代史の「語られない」部分を成功作も失敗作も含めて映像で表現してきたワイダにとって、まさに「ポーランド人のために」このテーマに取り組む必要があったのに違いない。それは、最初に触れたイェジ・アンジェイエフスキ原作のワルシャワ・ゲットー蜂起の時の塙の外側のポーランド人のユダヤ人に対する関係を描いた『聖週間』⁶⁾をワイダがまもなく映像化したことから推測できよう。この映画もまた、時代に敏感なワイダの触覚の中に反ユダヤ主義の非難を招きかねない危うさを蔵しているかもしれないし、あるいは自らの反ユダヤ主義を免罪しようとするポーランド人のための映画だ、との非難が起こるかも知れないにしても、である。

(この原稿は2001年11月に大東文化大学での講義資料としてまとめたものである。ここで取り上げたいいくつかの論点がこの先どのような展開を見せるかに興味があったためしばらく発表を控えていたものである。ユダヤ人とポーランド人の関係の歴史については今や膨大な文献があり、整理するだけでも容易でないが、機会を見て紹介してみたいものである。)

- 1) この場面はコルチャックが子供たちに死に備えさせるためにゲットーの中の孤児院で上演させたタゴールの戯曲『郵便配達人』の翻案である。
- 2) Sommaire, Numéro 1367. Du 17 au 23 janvier 1991, pp.70-73. 寺門祐子訳。
- 3) 小原雅俊「ポーランドのユダヤ人——『コルチャック先生』を観て」『図書』1991.11、岩波書店。この引用はほとんどが次のヤン・シチギェルの記事による。Jan Szczygiel, *Święty bez aureoli* Polityka, 26.1.1991.
- 4) Ludwik Hirszfild, *Historia jednego życia*, Spółdzielnia Wydawnicza Czytelnik. Warszawa 1946: 小原雅俊「ポーランドのユダヤ人」『大東文化』1989.12.
- 5) Adolf Rudnicki, *Krakowskie Przedmieście pełne deserów*, Państwowy Instytut Wydawniczy, Warszawa 1986: 小原雅俊「ポーランドのユダヤ人」『大東文化』1989.12.
- 6) アンジェイエフスキ[、イェジュイ]著「聖週間」吉上昭三訳(『東欧の文学 パサジェルカ<女船客>他』所収、恒文社、1966)



—2012 コルチャック年 特別記念企画— コルチャック先生の遺してくれたくれたもの

講演／展示会／映像上映／新刊書籍紹介

講演「子どもの発見と教育改革」

塚本 智宏

2012年11月20日、札幌では、W.タイス・ワルシャワ大学教授の講演(佐光伸一さんの通訳)、映画『コルチャック先生』の上映、コルチャックの子どもの権利思想に関する展示、塚本のコルチャック先生の「最後の行進」に関する小講演、という具合で

今から考えれば欲張りな企画でした。とくに展示はその準備などには協会のみなさまの応援があってようやく実現に至りました。映画・講演・展示などそれぞれにご感想・ご意見などたくさんありそうでしたが現状でなお把握しておらず、今後のためにも何